

# 遠藤周作『女の一生 一部・キクの場合』について

奥野政元

『女の一生 一部・キクの場合』は、一九八〇（昭和五五）年一月一日より、一九八一（昭和五六）年六月一日まで、『朝日新聞』に連載された。作品はその題名に象徴される如く、キクという女性の短くも厳しい苦難の一生を描いている。題材となったものは、一八六七（慶応三）年六月一三日から始まって、一八七三（明治六）年まで続いた、長崎浦上のカトリック信徒が、幕府と明治新政府より受けたキリスト教弾圧の歴史、所謂浦上四番崩れと言われている史実である。しかし主人公のキクは、浦上に生まれ育ちはしても、馬込郷の住人で、そこは、同じ浦上ではあっても、中野郷や本原郷とは違い、キリシタンは周囲には居らず、むしろ隠れキリシタンを「クロ」と呼んで差別していた側の住人でもあり、キクも信者ではない。ただ幼い頃、木に登って降りられなくなったところを、通りがかった中野郷の清吉に助けられたが、駆けつけた従兄が清吉にキクが泣かされたと勘違いし、清吉を殴りつける事件が冒頭にあり、そこで従兄が口走った「クロ」という言葉に、「不吉な暗い場所」を連想すると同時に、優しい少年の顔を、キクは一緒に心に焼き付けてしまう。この清吉とキクとの運命的出会いをプロローグとして、作品はあまりにも苛酷なキリスト教迫害の史実に即し、それぞれの登場人物の愛と信仰の軌跡を描き出している。特にキクは、最後まで信仰には至らなかったが、清吉のために自己のすべてを捧げつくし、聖母マリア像の前で息をひきとっていき、マリアそのものの声を語り手から引き出す

ロインとして描かれている。

作者遠藤周作は、その代表作『沈黙』においても、イエス・キリストの言葉を書き留めている。まさしく神は沈黙しているのではないと言う通りである。しかし超越的絶対者の神の声を、このようにあからさまに語り出せば、そこで一切の人間の声は消えてしまうであろう。ただ作品の作者と語り手とが、一体であるという前提に立てば、そのようなことも言えるが、その関係を切り離して解釈すれば、神の声の内容も、語り手に限定収斂され、作者と語り手の二重の視点が想像される。『沈黙』に於いては、佐伯彰一氏が指摘したように、状況の説明を語る純客観的叙述部分と、主人公ロドリゴを視点人物とした純主観的語りの部分とが、交互に組み合わされ、ついで半客観、半主観とでも言うべき三段構成の叙述をとり、読者を無理なく作中のドラマに導いているようである。しかし語り手の多様さは、作者隠蔽の効果も發揮する。しかも一方、作品のクライマックスで、決定的なイエスの言葉を描いているが、このときの作者と語り手と主人公の関係が、もし一体となるものならば、描写のリアリティを保障する根拠が、作者の意図に収斂されて弱くなってしまふことにもなる。『沈黙』の最後に「切支丹屋敷役人日記」という客観的資料をそのまま置く必然性も、そのあたりにあつたと思われる。

ところが作者と語りの問題で、遠藤はこの作品では、全く違った方法で臨んでいる。その冒頭は、次のように始まる。作者はまず――

この小説に登場する二人の娘を御紹介しておかねばならない。

作者自らが、最初に顔を出して、このように語り始めるということは、あくまでも一つの物語を今から語りますという宣言でもあって、ここで作者は、明確に語り手と物語とを区分している事が明らかである。にもかかわらずというか、

あるいはそれ故といふべきか、作品の決定的クライマックスで、マリア像を通じてマリアの声を描いている。この語り手は最初に作者と指示されているから、これは遠藤その人だともいえるが、作者という名の語り手だとすれば、眞の作者はその奥に今一人いることになる。ただ、『沈黙』の場合も、このキクの場合も、イエスやマリアの声を、直接語らずにはおられないような作者の衝動も確かに伝わってくる場所でもある。そのような遠藤の神への信仰、それが実作の上で自ずとしかも烈しく流露するところに、彼の小説の特色もあるが、彼の衝動の強さには、キリスト教の教理そのものから言えば、意味が少し逸脱してくるところもあることが、従来から問題とされ、注目されている。たとえば『沈黙』でイエスの声が出されるのは、ロドリゴが踏み絵に足をかけるといふ、ある意味では背教につながるかねない行為への促しになっているのであり、またキクの場合のマリアは、神への信仰を持ってないまま、マリアへの反逆のはての繰り言にまみれたキクを救う言葉となっている。極端な言い方をすれば、イエスは主なる神を汚すことを司祭にすすめ、マリアは信仰の告白や行為抜きにキクをその言葉によって浄化している。

このようなイエスやマリアの声を提示する作品構成上の必然性とは、ロドリゴやキクが身に負わされたこの上もない残酷さと悲惨さにある。そうした残酷さに応じて発せられたイエスの言葉「踏むがいい。お前の足の痛さをこの私が一番よく知っている。踏むがいい。私はお前たちに踏まれるため、この世に生まれ、お前たちの痛さを分かつため十字架を背負ったのだ。」は、ロドリゴに加えられ続けた残酷と悲惨へのイエスの憐れみに満ちている。またキクの場合、マリアの憐れみはより一層正確に描かれている。キクとマリアとの出会いを、作品中からすべて次にあげてみよう。

最初にキクがマリア像に出会ったとき、「(スパイたち)キクが息をのんで凝視すると、マリア像に「しずかな微笑がうかんだように思われた。」とあり、ここでは作者は直接出てこない。またキクは清吉から聖母マリアのメダイを贈られ、

そのマリアに向かつて祈ってもいるが、ここでもマリアからの応答はない。「邂逅」次にマリア像との対峙が描かれるのは、清吉が西役所で拷問を受けているときである。「落日」そこでのマリアはキクの「怒り、恨み、呪詛という祈り」を「大きな眼を見ひらいたまま、しかと聴いていた。」としか描かれていない。三度目にマリア像が描かれるのは、明治新政府となつてしばらく何も起こらなかった頃で、清吉にマリアとイエスの関係を聞かされて、マリアに胸の内をさらけ出すところであるが、そこでのマリアは「妹にやりこめられて困り果てている姉の様にみえた。駄々をこねている子供の前で当惑しきつた若い母のようにもみえた。」と描かれている。「再会」四度目は、清吉が津和野へ送られたことを知ったキクが、マリア像を碎いてやろうとして聖堂にかけつけると、ロカーニユ神父たちが祈りを捧げているところであつた。「別離」五度目は、清吉のいない間、聖堂でキクは毎日のように恨みの言葉をマリア像に投げ続けるが、「聖母の像はかなしげにキクを見つめているだけだつた。」と描かれている。「群像」六度目は、伊藤に汚されたキクが、聖堂のマリア像に孤独な恨みをひとりごとのように言い続けていると、ミツと熊蔵に出会つたため、マリアの反応は描かれていない。「恵まれた者と恵まれぬ者」そして、中国人の客と接しているうちに血を吐き、行き場のないまま、最後の力をふりしぼつて聖堂のマリア像に会いに来る。これはキクの生前最後の場面で、結末に近いところである。「雪そして聖母」キクは血を吐き咳き込みながら涙を流すと、「聖母の大きな眼にキクと同じように白い泪がいっぱいにあふれた。あふれた泪は頬を伝わりその衣をぬらした。」と描かれ、キクの叫びに対して、「キクのその叫びを聖母は、はっきりと聞いた。聖母像は大きな眼に涙をためたまま、強く強くうなずいた。」さらに続くキクの訴えに「聖母は泣きながら烈しく首をふつた。」と描かれ次の言葉が続く。

（いいえ。あなたは少しもよごれていません。なぜならあなたが他の男たちに体を与えたとしても、……それは一人の人のためだつたのですもの。その時のあなたの悲しみと、辛さとが……すべてを清らかにしたのです。あなたは少

しもよごれていません。あなたはわたしくしの子と同じように愛のためにこの世にいきたのですもの。うつ伏したキクの体はもう力尽きて身じろぎもしなかった。

（今夜の雪は一晩中、ふるでしょう。よごれたものを、けがれたものを、あのたくさんの雪が白く浄めるでしょう。やがてこの長崎の街は純白の世界になるでしょう。人間のよごれ、けがれ、苦しみ、罪がすべてその純白の世界のなかにかくれるように、あなたの愛があなたにさわった男のよごれを消した筈です。）

そして聖母はキクを促した。

（いらっしやい、安心して。わたくしと一緒に……）

これよつてみると、キクの訴えや祈りに対応するマリアの客観的な反応のすべては最後の場面に集中していることがわかる。それは第一に、白い泪がいつばいにあふれことから始まり、強く強くうなずき、やがて烈しく首をふつて、キクによごれを否定するのである。つまりまずマリアの憐れみが、泪と共にいつばいにあふれ出したということでもあらう。ただ作者遠藤は、ここでのマリアの泪やうなずきを、「憐れみ」とはどこにも表現していない。あるいはマリアの癒し、マリアの愛と呼んでいいのかも知れない。三木サニア氏は、遠藤固有の「母なるイエス」の核心に「アガペー（悲愛）」があり、その愛に近似した愛の相をこの作品に描き出したと言われる。マリアも最愛のイエスが逮捕され、咎うたれ、血をながし、十字架で死んだときに、キクと同じように、苦しか、辛かと泣いたのであり、キクはそのことを知らないとは、すでに作中に表現されていたところであった。このようなところから三木氏は、「キクの清吉に対するアガペー的愛と、聖母のイエスに対するアガペーが重層的に映し出されている。」と指摘し、「マリアのように、マリアとともにその運命を受容し、自己聖化の道を辿った。」とまで言われる。こうした読みが、あるいは作者遠藤の意図したものであったのかも知れない。

しかし、では作者のこの意図は、意図通りの効果をあげているであろうか。キクがマリアによってその愛のうちに受容され、浄化される契機は、キクの清吉に向けた無垢で純粹な愛の故であろうが、その愛の必然性が、この作品では不明瞭であるという批判が、一方で出されている。それに対して、無知ではあるが、無垢な封建時代の小娘のいらしさが出ていて、少女の美しさがあるとする反論もある。キクは確かに無知であり、無垢でもあるようだが、キクの清吉への愛、その根源には、今少し複雑なものがあり、最初の出会いの場面にそのことはよく象徴されている。それは従兄の発した「クロ」という言葉、またそれにまつわる「不吉な暗い場所」の連想である。その翌日キクは「お婆」にクロについて聞いている。「あつちには遊びに行ったらいかんぞ」「あそこに行ったら祟らるつとぞ」ときびしい表情で言われた言葉は、「キクに一種いいがたい不安と恐怖心を」起こさせた。またその頃、キクは夢の中で、清吉と再会している。花をつむキクたちの背後で清吉が笑いながら誘うが、「行ったらいかん」「そこに行けば悪かことのあるとげなね」とミツたちを制したところ、清吉は「言いようのない哀しみの色」をうかべ、寂しげに背後を向いて去ってゆく。夢から覚めたキクは、清吉の孤独な姿を思い出し、「その罪が自分にあるような気さえ」している。実はこれが、清吉にかかわるキクの愛の原点である。「クロ」という言葉に連想される不吉、暗さ、恐怖、これらは人間社会に抜きがたく内在するタブーと差別意識の残酷さと悲惨さを暗示するものである。その暗示の強さが、少年の親切とやさしさを一層強く刻みつけ、キクを切なくさせるのである。しかしこれは愛というよりは、憐れみであり、より一層強く言えば、憐憫ではなからうか。この憐憫を愛として我が身に引き受ける契機となるものが、夢の中で暗示された清吉への自己の罪であり、その罪意識が清吉への限らない責任の自覚となる。つまりキクは清吉を守り保護し支え続けることにすべてを捧げるのであるが、それは同時に清吉を支配することでもあり得ると言えよう。(あん子に会うても悪うはなか)という目覚めた後の寢床でのひとりごと、憐憫に発する罪意識に裏打ちされた倫理的使命感として出されたものでもあり、それは理由

もなく渾々とわき出る愛の情熱とは微妙に違った自己正当化の論理でもあった。だから悪くはないという言葉が出るのである。あるいは愛を正当化する論理の、それが企みなのかも知れないが、それは独占欲の正当化でさえあり得る。キクが清吉を教会やマリアから遠ざけようとすることも、そこに由来するであろう。

一方、このようなキクの愛の対象となる清吉については、先にあげた「読書鼎談」でも管野昭正氏が、「清吉という人物像がはつきりしない。」と指摘しているように、キクの深い思い入れに見合う存在感がないようである。キクの単純で純粹な愛は、死ぬまで長続きするのに、清吉との直接交渉の経緯はほとんどなく、キクの最初からの思い詰めで終始している、同じ座談会で岡松和夫氏も指摘している。清吉は長崎に帰った後、キクの面影がいつまでも残っていたから、長い間嫁をもらわなかったが、それでも三五歳の時、時津の女性と結婚して、子供も四人いることも描かれている。その清吉に、伊藤清左衛門から手紙がきて、津和野で再会し、彼からその後の受洗に至る経過と、聖母としてのキクへの懺悔を聞くというのが、結末のエピローグである。そしてこの伊藤こそが、清吉へのキクの思いを利用して陵辱し、二人をさんざんに苦しめ続けた張本人である。その場面で、酒の臭いを漂わせながら、伊藤は「ゆるしてくれ」と清吉に頭を下げる。この男が切支丹だけではなく、切支丹でもないキクまで、だまし苦しめていたことを知った清吉は、憤怒と無念さとに打ち震えながら、「なして、そげん、むごかことば、したとか」と言い、「ひとでなし」「悪魔」と罵る。それに対して伊藤は、「……清吉さん、俺はあん時、あんたの羨ましかった。」「妬ましかった……」「俺あ、おキクさんば欲しかったとい。心の底からほしかったと」「ゆるしてくれ。おキクさん。」と、うずくまり、肩を震わせながら語りつづける。このようにして改めて作中の人間関係を見直すと、キクに対応する存在感をもって前面に浮かび出るのは、清吉ではなく、むしろこの伊藤ではないかとさえ考えられる。作者遠藤も、作品の後に収められた「筆間雑話」の中で伊



藤について次のように述べている。

伊藤清左衛門もある人物をモデルにしたが、しかし最初のプランではかれがこの小説の中でこれほど重要な人間になるとは考えもしなかった。書きすすめるうちに、この陋劣な人間に私は同情し、同情しただけでなく愛情さえ抱くようになった。私は彼を最後まで見すてる気持にはなれなかった。

伊藤が作中で、作者にも考えられなかった重要性を帯びてくるのは、慶応三年の大政奉還にはじまる幕府の瓦解からで、「落日」の終わりから「再会」の章以後である。「幕府が倒れば武士はなくなる。伊藤殿はその時、どうされる」と本藤舜太郎から問われて、伊藤は「泣き笑いのような顔」をして「はあ」と答えるだけであったが、やがて南蛮寺のロカーニユ神父を訪ねて、異国の領事館への就職を哀願する尾羽うち枯したみすばらしさを表す。しかし明治新政府が、浦上切支丹を流罪に決定してから、伊藤は西役所の役人として、信徒を苦しめることになる。しかも清吉たちが送られた津和野へ監視役として同行する。そして、これ以後の伊藤の人物形象に、作者は「あわれ」を多用し始めるのである。「ばってん、あん男ば見とつたら、なしてか、あわれか気のするたい、なしてじゃろ」と清吉たちが言い出す。また酒に酔って、だらしなく涎をたらして眠りこける伊藤を見て、本藤は「何とも言えず、あわれな男だな」と言う。外から見られた伊藤のあわれさに対して、伊藤自身の自分についての思いは、いかにも複雑である。清吉を必死の思いで心配するキクにつけいり、キクを犯した伊藤は、バツの悪そうにキクを見ていたが、急にやさしい声を出し、また来ることと、清吉へのことづけを考えておくといい捨てて、逃げるように階下に降りていく。伊藤は自分の行為の残酷さと卑劣さを知り抜きながら、その行為に及ぶ自分を止めることができない。できないどころか、むしろその行為が卑劣なものであればあるほど、一層残酷にふるまっている。そしてその後では一人で、(俺あ……まこと悪か男ばい。まこと悪か男たい)と呟き続ける。キクに頼まれた清吉へのことづての手紙その他を清吉に渡しながら、キクがすべてを犠牲にし



て作った小判の金は渡さず、同役二人を連れて酒を飲み、その金の出所を自分から言い出して、自分はよごれたきつた者で、女の心を踏みにじって酒を飲む人間だとくだを巻く彼の脳裏には、犯され続けたキクの顔が離れず、その眼から泪の流れたのを新たに思い出すたび、鋭い痛みが胸を走るのを覚える、そのような男である。

だが伊藤という男のふしぎさは、前夜それほどやましさを心の痛みを感じたのに、その痛みの分だけ、翌日囚人たちを苛める点だった。

と作者は伊藤の特異さを説明している。この伊藤という特異な人物像の内実とは何であろうか。たとえばその翌日、幼い子を膝にかかえた若い女性を選んで拷問する場面で、作者はその母親が選ばれた理由をキクに似ていたからだと言い、「裸になれ、裸に」と叫ぶ伊藤の拷問行為を「その若い母親が驚愕して、ものも言えないのを見ると、更に加害的な衝動にかられて」と説明している。驚愕のあまりものも言えない若い母親の顔に、伊藤が見たものは、おそらくキクの泪をながす顔でもあったであろう。結局この母親は転んでしまふ。するとその晩、伊藤は酔いつぶれて呼んだ女郎に、「俺の顔に唾はきかけてくれんか」と言っては顔をゆがめるのである。彼のキクに対する要求は次第に一層苛酷なものになり、また女性の切支丹への拷問にも、キクに似た娘を捜し続ける。こうした拷問行為の心理的感覚的動機について、後に作者は「自分でも抑えることのできぬ快感と衝動がそうさせる」と言っている。抑えることのできぬ快感と衝動、この根底には何があるのか。伊藤が残酷な衝動を爆発させるのは、女性に対してはキクの面影にかかわるものがあつたのは、今見た通りである。一方清吉についても、一度だけ伊藤はこの衝動を起こしている。それは清吉がキクの思慕を知って、切なさのあまり、涙を流しながら自分の事は忘れて良い人の嫁になつてくれと、伊藤に言つてを頼んだとき、その涙の光を見た時、伊藤の胸には言いようのない憐れみと言ひようのない残忍の衝動が同時に起こつた。と作者は描いている。人から憐れみを受ける伊藤が、清吉を憐れむというのだが、それは同時に残忍の衝動でもあると

いう。

憐れみと残忍とが同時に起こる、あるいは連鎖する衝動、この構図が伊藤の残忍を解明するものでもあろう。そして彼の残忍が他者に向けられるだけでなく、女郎に唾を吐きかけさせたり、自己の残忍行為を思い出すたびに鋭い痛みを感じているわけで、かれは自己に対しても残忍であったことが分かる。その残忍の根底に憐れみが共存しているとするなら、実はキクにも、この構図は認められないわけではない。キクの清吉への愛が、憐憫と罪の意識に基づく倫理的使命感の要素を帯びている事を先に指摘したが、その場合それが自己への残忍さの表れとして描かれているとも解し得るわけで、つまりキクと伊藤はこうした点で離れがたく結びついてくると言えよう。

いささか憐れみの感情に拘りすぎるかも知れないが、ここには実は、遠藤も注目し続けたグレアム・グリーン「事件の核心」のテーマともかわるものがあるからである。グリーンは同作品の自序で作品の意図について、「私はスコビーの物語で、『恐怖省』にちよつと出てくるテーマを拡大しようと思っていた、同情とは区別されたあわれみの人間に対する悲惨な効果、というテーマである。私は『恐怖省』の中にこう書いた。「あわれみは残酷である。愛は、その周辺をあわれみがうろつくとき、安全ではなくなる」「スコビーの性格は、あわれみがほとんど奇怪ともいえる傲慢の表現になりうることを示すべく創られたものである。」と述べている。憐憫が傲慢さと深くかわるとは、おそらく憐憫の発動する原因に、優者が劣者にかける哀れみの要素があるからであろう。その感情に引きずられてなされる行為は、結局憐憫の対象者を支配することに結びつくところがあり、それは言わば全能の神の支配を無視することにもなり得るからである。そこに罪の陥穽もあり、スコビーもやがて教会と神を欺かざるを得なくなつて、計画的な自殺をとげてしまう。この自殺も傲慢な行為でもあり得るし、自己に対する残忍な行為でもあつて、それは神の恩寵と慈愛に対する拒絶

の行為ともなる。そしてこの面をのみ強調するならば、彼の罪はより一層単純明快なものとなるが、それがいかにも人間的余りに人間的な憐憫の情に発するものであることを強調すれば、この罪は人間の実存に根ざす根源的なものにもなり得るものではなからうか。たとえ憐憫が身勝手に自己中心的な感傷に根ざすものであり、その情に起因するすべての行為も独善的なものであつて、そこに罪は抜きがたく存在するとしても、その行為にほとんど我を忘れて突き進む衝動を抑えることの出来ない情念の発動には実存に根ざす人間的なりアリティがある。そして問題は、この独善や身勝手さの犠牲となる他者の傷と恨みの代償にかかわるところにある。

伊藤とキクの場合についてはどうであらうか。伊藤は清吉、キクのみならず、津和野に送られた信徒すべてに残酷な行為を及ぼして、償いきれない恨みの根源となつてゐる。一方キクの場合はどうであらう。キクはむしろ伊藤への恨みを持つべき最大の当事者であるが、騙されているとは言え、伊藤への恨みはほとんど描かれていない。嫉妬にかかわる恨みという事では、むしろマリアこそが彼女の恨みの対象でもあつた。既に詳しく眺めたように、キクはこの恨みの故にマリア像から離れることができなくなつて、最も辛く苦しいときにこの像に吸い寄せられるように近付いていつて、その前で死に果ててしまふ。つまりキクの恨みは、彼女にも気付かないところで、この世の最後で唯一の慰めと救いの場所でもあつたことが明らかとなる。このようにして恨みや傷が癒されていく所に、神の恩寵が現れるとするなら、この恩寵は同時に伊藤にも及んでいくはずである。マリア応答の言葉を最後に書かざるを得ぬ作者の衝動は、伊藤救済の伏線にもなつていたのである。

ここで改めて注目したいのは、エピローグに登場する伊藤の必然性についてである。作者はこの作品を創作するにあつて、多くの資料に拠つてゐるが、下野孝文氏は、実に綿密にそれらの資料が作品にどのように活かされたかを調べ

上げている。その結果、長崎の風物等については本川桂川『長崎風物誌』（ピタカ、一九七八・七）及び『長崎方言集』（図書刊行会、一九七六・五）などを中心にし、切支丹迫害については、浦川和二郎『浦上切支丹史』（全国書房刊、一九四三・九）及び『切支丹の復活』後編（国書刊行会、一九七九・二）、更に永井隆『乙女峠』中央出版社、一九五二・九）、沖本常吉『乙女峠とキリシタン』（津和野歴史シリーズ刊行会、一九七一・七）、池田敏雄『キリシタンの精鋭』（中央出版社、一九七二・九）などが中心であり、それらがどのように使われ、そこから何が明らかになるかを論証している。それによるとエピソードで伊藤と清吉が再会する場面は、沖本、池田の著書に拠ったことが明かで、池田によると、大正七年の夏、かつてキリシタンを津和野で説得していた元役人、森岡幸夫の長男健夫が、当時五五歳で、カトリックの洗礼を受け教会の修道士となっていたが、守山甚三郎の健在を知り、ぜひ会ってお詫びをしたいと手紙を守山に出した事がきっかけで、津和野で会ったようである。この時「かつての迫害者と被害者」は、手を取り合って乙女峠を登り、迫害の現場に跪いた健夫は涙ながらに「私の父の罪をゆるしてください」と甚三郎翁にあやまったという。作者遠藤は、これを大正二年晩夏のこととし、「迫害者と被害者」を伊藤と清吉にしているのである。この結果について下野氏は次のように述べている。<sup>5)</sup>

資料を手にし、結果作品を和解の場面で結べた意義は大きい。それによって、「キク」を雪で浄化し、聖なる存在へ昇華した展開もこの場面へ繋がり、その〈生〉の純粹さ、聖性をさらに高めることになる。

確かにこの場面は、キクの最後の場面と直結するもので、効果もありその意義も大きい。ではこの結果は、当初から予定されていたものであったかどうか。下野氏の書きぶりでは、予定外の結果でもあったように受け取られる。作者遠藤の伊藤についての示した文面にも明らかのように、伊藤の存在意味は作品形成の途上で急に抜きがたいものになったようで、そのことも考えれば、これは作者にとっても予定外のことであったように、私も理解する。おそらく伊

藤とキク及び清吉との交渉が深まりを見せる中で、伊藤の実在性に愛情すら抱き始めた作者が、語り手の限定を踏み越えてマリアの言葉を描いた経緯のうちに、作品形成の新たな方向が開かれていったのであろう。かくしてキクの清吉への憐れみに引き出された愛の情念は、マリアの言葉を経て、清吉よりも、むしろ伊藤を救い出すものとなって完成されたのだと言えよう。肩を震わせながら清吉ではなく、キクに向かって語り続ける伊藤のあわれな姿を見ると、清吉はもうこの男を罵る気持ちもなくなつて、

「もうよか、伊藤さん。おキクさんはあなたに苦しめられたばつてん、あんたば別のところに連れていったとたい。そいだけでもあん人の一生は、無駄じゃなかつた……無駄じゃなかつた」

と、鼻をつまらせて自分にむかつてそう言いさせるのである。「無駄じゃなかつた」というところに、恨みの解消もあり、清吉と伊藤の対峙のうちに神の慈愛とも恩寵とも言うべき和解が成立し始めている。そのようなキクの一生が前面に出てくるが、しかしその結果、この作品で展開せんとした作者遠藤の今一つの意図は、その影を幾分減じるようになつたようである。

作者はこの作品創作の動機について、「長崎への恩返しのももり」と述べ、「長崎の歴史を知れば知るほど、それを学べば学ぶほど、この街の層の厚さと面白さに感嘆した。更に私の人生に問いかけてくる多くの宿題も嗅ぎとつた。」とも述べている。この時の宿題の一つに、長崎の信徒が迫害にもかかわらず、社会や歴史を動かしたその根源の力、今日の日本社会形成を可能ならしめた信仰の力への着目があったと考えられる。苛酷な迫害を武力や一揆に訴えることなく堪え忍び、「かほそい信仰の力だけで」ついに当時の政府を動かし、歴史を大きく作りかえたその力に対する着目である。作者の当初の意図には、この点への強い関心があったものと思われる。それは完成された作品中にも明らかに認められるもので、フェーレ神父とプチジャン神父の日本伝道に関する考えの相違等のうちに、西洋と日本の課題なども扱うよ

うに進められていた。また伊藤と対照的な本藤舜太郎の存在も注目される。彼は日本の今後を考え、着実に自らの進路にも見通しを持ち得た下級武士で、外国語を習い、幕府の行く末にも見切りをつけ、横浜に出て新政府の外務省に職を得、やがて岩倉に見いだされて遣米欧使節の一員にまでなつて出世していく。その本藤のアメリカでの体験などが、田中彰『岩倉使節団 明治維新のなかの米欧』（講談社、一九七七・一〇）や久米邦武述『久米博士九十年回顧録』（早稲田大学出版部、一九三四・一〇）そして久米邦武編『特命全権大使米欧回覧実記』（岩波文庫、一九七七・九）などに拠りながら描かれていること、またそれが使節団にも影響を及ぼしていくことなどは片岡弥吉『浦上四番崩れ』（筑摩書房、一九六三・一〇）にも拠っていることについても下野氏は触れている<sup>⑤</sup>。信徒への迫害が、欧米諸国で大きな反発を呼び起こしていること、それを無視できなくなつて、禁教の高札が取り除かれ、信徒達がそれぞれ帰京することなどである。そして浦上信徒の代表者でもあり、最後まで信仰を貫いた仙右衛門が解放されて浦上に帰ることになつた喜びが、次のように描かれている。

（俺どんは……勝つた）

土百姓よ、クロよと嘲られた自分たちが一揆や反乱ではなく、ただ信仰の力でお上に勝つたのだと仙右衛門は思った。ただかほそい信仰の力だけで……。

作品は、この後にエピローグが置かれて終わる。つまりこの仙右衛門の言葉で、本来の作品は終わっている筈である。そして資料通りにすすむならば、エピローグは最後まで信仰を貫いた今一人の生存者、守山甚三郎と迫害者の息子との和解で結ばれ、かほそい信仰の力が現実を作りかえた勝利と神の恩寵との主題に直結していくものとなつたが、作者はここに伊藤と清吉にその役割をあてたのである。伊藤も清吉も単純明解な意味で信仰を守り通したとは、必ずしも言えない。伊藤は当然として、清吉も一度は拷問に耐えかねて転び、家に帰つてみると母から説き伏せられて信心戻しをし

た信徒でもあった。

しかしこのエピソードによって、主題は一気にキクの生涯とその愛の姿に収斂していくことになった。そしてそれはそれで「女の一生」という題名に相応しい出来事でもあったと考えられる。

注① 三木サニア『女の一生 一部キクの場合』試論（『久留米女学院短大紀要』第6号、一九八三・三二）

注② 「読書鼎談」（『文芸』、一九八二・五）

注③ 同右

注④ グレアム・グリーン『事件の核心』序文（小田島雄志訳、グレアム・グリーン全集一〇、早川書房、一九八二・八）

注⑤ 下野孝文「遠藤周作『女の一生』一部」（一）～（三）（『国語国文薩摩路』第五〇号～五二号、二〇〇八・三～二〇一〇・三二）